いまをだいじに

夢を持ち　なかよく　かしこく　たくましく　生きる室っ子をめざして
～いまをだいじに　なかまをだいじに～

校長　宮脇　真一

冬休みに入る前日、職員室を訪ねてきた１年生の男の子に「『後期前半』ってどういう意味ですか？」と問われました。「後期の前半たい！」と答えようとして、これでは答えになっていないことに気づき、いろいろやりとりをしたあげく、「1 年生の 1 年間を前期と後期に分ける。前期は４月から 10 月はじめまで。後期はその続きから３月まで。その後期の前半が 12 月までにしてるということよ」という結論で終わりました。

素朴な「問い」ほど、説明は難しいものです。

春を待つ（2026/1/8 撮影）

正月はなぜめでたいか　～情報を「自らとる」こと～

その、「『後期前半』ってどういう意味ですか？」がずーっとひっかかっていた冬休みを過ごし、今朝冬休み明けの集会が行われました。まずは年頭の挨拶は「あけましておめでとうございます」です。この「おめでとうございます」を何気なく口にしますが、ふと考えたのは「なぜ」「めでたい」のだろうか？という次の「問い」。こどもたちにも投げかけて見ました（オンラインでの集会ですので、その時直接の反応を受け止めることはできませんでしたが）

私の自宅に、岩井宏實『正月はなぜめでたいか』という本がありました。1985 年に発刊されていますから、もう 40 年前の話ではありますが、この本には次のように書いてありました。一部を抜粋します。

「・・（前略）・・正月が機械的に循環する暦（こよみ）のうえでの最初の月で、元旦がその最初の日ということ自体では祝うべき理由はあまり見当たらない。ところが昔、暦法（れきほう：毎年の暦を作成するための方法のこと*下線部宮脇加筆）が採用される以前は春秋二回の季節感しかなかったので、春のはじめをもって年のはじめとしていたのであった。（中略）つまり、正月とはすべての生物が躍動する春を迎え、人々がその生命力の更新をよろこび、祝ったところに意味があり、“めでたさ”があったのである」

この岩井氏の考えに拠れば、やはり「めでたそう」だという気持ちになります。

このことを、AI にも聞いてみました。

１ 年に一度、歳神様（としがみさま）という新年の神様が家々を訪れ、五穀豊穣や子孫繁栄、健康、幸福をもたらしてくれると信じられていたため」

（私が大好きな漫才師の「ナイツ　塙」さんなら「チョット GPT で調べてきました」といったところでしょうか）

集会でこの話をする前に、６年生の女の子に「分からないことがあったらどうしますか」と尋ねたところ「お母さんに聞いてみたり、google で調べたりします」とのこと。「AI の回答は見ますか？」とさらに尋ねると「AI の回答を見た上で、さらに公式のサイトで確認します」と答えてくれました。さすがです。一つの情報を鵜呑みにするのでなく、様々な確認をすること。大人も見習わなければならない「資質・能力」が備わった６年生の姿に頼もしさを感じました。

こどもたちの活動の様子は、本校 HP（https://es.higo.ed.jp/muro/）でも公開しています。